

都市と共生一人、空間（基盤施設）、文化（制度・政策）

閉鎖的な村落コミュニティとは違って、都市は多様で異質な人と文化が集まる開放的な場所である。多様な人々が集まってともに暮らし出すと、当然、様々な問題に直面することになり、都市は共同性（共生の方法）を育んできた。このように本来異質な空間である都市は、同時に共生の空間でもあるという両面性を有する。近代以前に繁盛した交易都市や商業都市はもちろん、18世紀以後、産業革命や資本主義の発展を経て本格的に登場した近代的意味における都市は、まさにそうである。

近代的意味における都市は資本主義と密接に関わっている。都市は、資本主義的生産関係が貫徹する側面から見ると生産、流通、消費の空間であり、そのなかで具体的な日常が育まれる側面からは生活の空間でもある。したがって資本主義的生活からなる様々な社会問題は都市問題でもある。都市は社会的矛盾が顕在化する現場であり、逆説的に社会問題の解決に向けたオルタナティブの根拠地ともなる。この点が、私たちが「都市」に注目する理由にほかならない。新自由主義的グローバル化や分権化が同時進行しながら空間のポストモダン的な再構成が展開し、都市に関する関心が呼び起こされている。国民国家の境界が弱められ、それまで国家が独占していた競争やアイデンティティ、社会運動などにおいて都市が重要な単位として浮上している。

現代都市が抱えている深刻な問題のなかで、根本的な一つは都市の共同性の解体である。資本（利潤を追求）や国家（権力）の論理が隅々まで貫徹通用する現場である都市空間は、弱肉強食や適者生存の激しい競争の場に変貌し、その結果、国民と非国民（移住者）、有職者と無職者、正規社員と非正規社員、富者と貧者、社会的強者と弱者などを区分けする差別と排除の論理が強化され、両者間の格差はますます深刻になっている。私たちが「共生」の問題をキーワードに提示する理由はここにある。つまり、共生の観点から都市を把握し、過去の経験や記憶を再構成（再解釈）して、現在の問題を診断し、望ましい都市生活を構想することが要請されているのである。

都市は多様な要素から成り立つ。経験や記憶という時間軸に基づいて、そのキーとなる多様な人、居住の土台となる空間（基盤施設）、両者の関わりの総体としての文化（制度・政策）などが調和して都市を構成する。この多様な諸要素は相互に密接に関連し、区別して取り上げることは適切ではないかもしれない。しかし各々異なる要素が共生の問題にどのように関係し、また作用するかを具体的に分析するためには、各々の要素に分けてアプローチすることも必要と考えられる。

第1部 人と関連しては、都市に流入した異邦人（移住民、外国人）、差別と排除の対象になった構成員（下層民、部落民、貧民、マイノリティ）をとりまく包摂と排除のメカニズムを共生の視座から分析する議論を含む。

第2部 空間と関連しては、ゲットー、ジェントリフィケーション、アゴラ、ネオ・ボヘミア（オルタナティブ・スペース）など、資本（権力）の空間化やそれに対抗する共生の空間創造をめぐる議論を含む。

第3部 文化と関連しては、文化交流や受容、同化政策、多文化政策、文化変容（アカルチュレーション）、文化混淆（ハイブリディティ）など都市の文化政治をめぐる様々な議論を含む。